

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：37105

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12309

研究課題名(和文)六朝期以前の賦に対する注釈に見える学術性に関する研究

研究課題名(英文)A study about learning of fu's comments before Six Dynasties of China

研究代表者

栗山 雅央(KURIYAMA, MASAHIRO)

西南学院大学・国際文化学部・助教

研究者番号：20760458

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、六朝期以前に成立した賦(中国に主に見られる長編の韻文を指す)に対する注釈の中でも、特に次の二種類を対象とした。第一に主に後漢期に活動した班固の「幽通賦」に対する彼の妹である曹大家の注釈であり、第二に北魏時期に活動した張淵の「觀象賦」に対する彼自身による注釈である。前者については、注釈活動を通じて曹大家による兄の班固への接近を確認することができ、同時に彼女自身の創作活動へも反映されていることを確認した。後者については、「觀象(天文観察)」という主題が作者である張淵にとって最も適したものであり、注釈にも天文に関する自らの知識と為政者による「觀象」の重要性を主張していることを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、近年は徐々に活発になってきたがまだ十分とは言い難い「辞賦」研究に取り組んだ点であり、同時に従来は作品を理解するための材料としてのみ利用される傾向が強かった「注釈」に対して、その学術価値を見出そうとした点が指摘できる。

また、その社会的意義については、一般には本文を理解するための補足として活用される注釈にも、注釈者による作品の理解が反映されていることが認められることから、文学受容の多様なあり方の理解につながるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, studied two kinds of annotations were made on the fu written before the Six Dynasties period. The first is the annotation of the soo Dake, his younger sister, who had been active mainly in the later Han period, and the second is an annotation by him for the 'Aiki Fu' of Zhang Buchi, who was active in the Northern Wei period. First, it was confirmed through the annotation activity, and it was able to confirm the approach to the brother of the elder brother by the Soke family, and it was confirmed that it was reflected in the creative activity of her own at the same time. Second, it was confirmed that the subject of the 'astronomical observation' was the most suitable for the author, bubuchi, and that it was argued that the knowledge of astronomy and the importance of 'observation' by the statesman.

研究分野：中国文学

キーワード：辞賦 班固 曹大家 「幽通賦」 注釈 張淵張淵 「觀象賦」

1. 研究開始当初の背景

(1) 「賦」研究における「賦注」

従来の賦学研究は、もっぱら賦本文のみに着目することで展開されており、いわば賦の作者側の視点から眺めた考察が中心であった。すなわち「作者の意図」に関するものである。その一方で、本研究が考察対象とした賦注は、そのほとんどが作品を理解しようとする側の視点を体現したものであり、「受容者の意識」の反映だと捉えることができる。また、これまでに「三都賦」に対する研究を行う中で気付かされた点として、「三都賦」の成立とほぼ同時期に成立した注釈にも一定の特徴が見られることが挙げられる。これらの賦作品に施された注釈(以下、賦注と呼称)は、注釈が施された当時の思潮を反映している場合が多く、やはり文学作品と政治社会との有機的関連を意識した研究を展開する必要があると考えられる。

無論、賦注は賦本文の従属物的要素が強いため、賦本文そのものを無視することはできない。本文理解の指標としての賦注の役割は常に意識しつつ、注釈が施された当時の思潮や時代性、あるいは注釈者が置かれた立場をも意識することで、賦注の学術的価値が確認できると考えた。それと同時に、それぞれの賦作品に対する各時代の理解の一端が解明できるであろうことも想定した。結果として、六朝期以前に正統と看做されてきた賦という文体への理解と受容の様子について賦注を通じて確認でき、文学史上の賦の理解にも新たな視座が獲得できると考えた。

(2) 「注釈」研究における「賦注」

また、中国における注釈活動に着目した場合、そもそも中国古典で注釈が最初につけられたのは、儒教の経典である「経書」や諸子百家の書である「子書」に対してであり、その後「史書」への注釈が行われるようになった点は注意すべきである。いわゆる「文学」は最も後発ということになるが、その中で賦に対する注釈が最も早く、この事実はより重視されるべきであろうと考えた。賦注は後漢の頃に初めて現れ、西晋期にその数が増加し、六朝期を通じて賦に対する注釈は継続される。このような文献への注釈現象は時代を問わず常に行われてきたものであり、中国文化の特質として位置づけられる。「賦」に対する注釈現象をその具体例として考察することで、中国文学の重要な一面を担う後世あるいは他の文体の注釈現象に対して、新しい研究成果が提供できると考えた。

2. 研究の目的

(1) 「賦注」に対する「学術性」の認定

本研究の最大の目的は、中国の文学作品、とりわけ六朝時期以前の賦注に対して学術的価値を見出すことにある。

六朝時期以前の中国において、四部分類の中でも「経・子・史」部に対しては早くより注釈までもその学術の対象として認められてきたが、こと「集」部に属する「文学」の注釈には、従来は『文選』に対する李善注や『楚辞章句』に見える王逸注などに対して体系的な研究が行われてきたものの、文学作品に対する注釈の殆どが、本文解釈のための一材料としての位置付けしか認められていなかった。

こうした状況に鑑み、本研究では賦注について自注と他者注の別、個人活動と集団活動の別に留意しつつ、後漢から梁代まで幅広く目配せし、当時に成立した賦注について、時代思潮や政治観や文化的傾向など、その歴史的な脈絡に従って考察する。このような文学的にとどまらない、文化的・歴史的視点など広く「学術性」に関する考察を通じて、六朝期の賦文学がいかに「正統」な文体としてみなされたかについて、新たな賦文学史の一側面を構築できると考えた。

3. 研究の方法

(1) 賦本文と注釈との関係性の考察

基本的な方法ではあるが、まずは注釈に基づく賦本文の読解を行うとともに、その注釈の形式的あるいは内容的特徴を見出し、賦本文と注釈との間に確認できる関係性について考察した。これはいわば「作品の内部」に関する考察だと言える。

(2) 作品、注釈および作者、注釈者の実際の立場の考察

作品、注釈に対する作者、注釈者に着目して、彼らが創作活動もしくは注釈活動を行った時代や、彼らが置かれた実際の立場について考察することで、主に作品が創作された背景や、当時に受容された理由について考察した。これはいわば「作品の外部」に関する考察だと言える。

4. 研究成果

本研究では、主に以下の二篇の作品およびその注釈について考察を展開した。

- 1、班固「幽通賦」の賦本文および曹大家注
- 2、張淵「觀象賦」の賦本文および自注

以下、これらについての研究成果を概括する。

(1) 班固「幽通賦」の曹大家注そのものの特徴

後漢時代に成立した班固「幽通賦」に対する曹大家注の特徴としては、以下の特徴を指摘することができた。まず、賦に対する注釈を通史的に眺めた場合、曹大家注は賦注の中でも最初期の例として位置づけられることを確認した。同時に、その形式的特徴として、従来は字句の説明や文意の通釈が指摘される他に以下の点を指摘することができた。すなわち、1) 漢代に流通した三家詩の中でも『齊詩』に依拠した訓詁が見られること。2) 「言己」という形式を用いた賦本文の解釈を示すことで、作者である班固との緊密さ(これは曹大家が班固の親妹であることと関係する)が認められること。3) 文献に依拠した資料を引用する際に、書名ではなく人名によって引用する例が見られること。以上の点が確認された。また、その注釈の内容分析を通じて、班固「幽通賦」の曹大家注と曹大家の「東征賦」との関連が幾つか見出すことができた。

(2) 曹大家注を媒介とした、班子父子の作品間の継承

これらの分析を行うことで、班彪・班固・曹大家(班昭)を包括する班氏一族の賦作についても、その思想的特徴を見出すことができる可能性を指摘した。主に班固「幽通賦」、班彪「北征賦」、曹大家「東征賦」の関係性を考察したが、これらは従来もすでに個別的に繋がり部分的には指摘されてきたものの、曹大家注の記述を媒介とすることで、初めて「班氏父子」というより広い枠組みでの繋がりを見出すことができるようになった。また、直接には本研究課題とは関わりがないものの、彼らが創作した賦作品が劉歆「遂初賦」とも関連があることを導き出し、前漢末から後漢初期にかけての賦の創作の継承関係を、実作の面から求めることができた。

(3) 張淵「觀象賦」の賦本文および自注の特徴

まず、「觀象賦」についてであるが、従来は中国でも日本でもほとんど研究されていなかったため、まずは「觀象賦」の全体像を明確にすることに努めた。「觀象」とは「天文觀察」を意味する言葉であり、全篇 222 句で構成される。漢代に創作された賦作品に比べれば非常に短篇ではあるものの、幾つの特徴を見出すことができた。まず、張淵が彼以前に創作された歴代の辞賦作品を確かに読んでいたであろうこと。次に、その創作時期が「觀象賦序」の「是時也、歲次析木之津、日在翼星之分」に基づき、「歲星紀年法」及び『礼記』月令の記述を利用することで、太延四年(438)秋七月に創作されたと考えられること。以上は、従来は指摘されてこなかった点であり、北朝時期及び『文選』編纂以前の賦の創作状況の確かな一例として非常に価値のあるものであると考えられる。併せて、注釈そのものについても、星々の配置や職掌に関する説明、賦本文と史実との結び付けを重視する点を指摘した。

「觀象賦」そのものについて、作品の構成の面では「都邑賦」を踏襲し、表現面でも同じく参考にしていることを指摘した。一方、他の辞賦詩歌作品の表現を「觀象賦」本文の表現の中に借用してはいるが、それは先行作品と同様の意味では用いておらず、本来の意味を転換もしくは拡張することで、新たに星々の形容として用いていることを確認し、これが賦作に対する張淵自身の工夫として認められることを指摘した。

(4) 張淵「觀象賦」の創作背景

「觀象賦」の創作背景として、当時に権勢を誇った崔浩の存在が大きかったであろうことを指摘した。これはすなわち、崔浩の北魏太武帝の信頼の多くが、彼自身が持つ「觀象」能力に対するものであり、また彼自身も『賦集』八十九巻を編纂するほどに、「賦」を中心とした文章を愛好し、そうした才能ある人物を評価していたと考えられるためである。「觀象賦」の作者である張淵は、崔浩との論戦に敗れて官途を失っており、この点から「觀象賦」を創作することで、直接には自己の「觀象」能力と政治態度、そして「賦」の創作力を崔浩に示すことを目的としたのではないかとする見方を提示した。

また、主に北魏時期の賦作品の創作状況についてであるが、張淵が「觀象賦」を創作した太武帝期はこれ以外に目立った辞賦創作はないが、これ以後には、彼と同時代に活躍した高允や游雅

による賦作が残されており、あるいは孝文帝期以降になると太武帝期に徴用された漢族士大夫の一族である盧元明や邪産などが賦を創作していることに着目したことで、彼らの賦作の特徴に、賦を通じて作者自身の政治態度を表明するものや作者自身の意に沿わない現状を吐露することを目的としたものが多いことを指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 栗山雅央	4. 巻 1
2. 論文標題 「張淵「觀象賦」及其自注初探」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『大夏与北魏文化史論叢』	6. 最初と最後の頁 287-304
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 栗山雅央	4. 巻 58
2. 論文標題 「班固「幽通賦」の曹大家注の特質について」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『九州中国学会報』	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 栗山雅央	4. 巻 10
2. 論文標題 張淵「觀象賦」訳注稿	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『西南学院大学言語教育センター紀要』	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 栗山雅央	4. 巻 01期
2. 論文標題 「關於「三都賦」以後「都邑賦」的展開情況」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『済南大学学报 社会科学版』	6. 最初と最後の頁 170-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 栗山雅央	4. 巻 9
2. 論文標題 「日中両国間の辞賦文学研究の差違について 21世紀以降を中心に」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『西南学院大学言語教育センター紀要』	6. 最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 栗山雅央	4. 巻 22
2. 論文標題 「従左思「三都賦」の文本内容論西晋の時代性と武帝司馬炎の影響」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『揚州文化研究論叢』	6. 最初と最後の頁 12-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 3件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 栗山雅央
2. 発表標題 班氏父子の賦作に見る「賦」の継承関係について
3. 学会等名 日本中国学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 栗山雅央
2. 発表標題 班氏父子の賦作について
3. 学会等名 中国文藝座談会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 栗山雅央
2. 発表標題 張淵「觀象賦」及其自注初探
3. 学会等名 “大夏与北魏文化史及統万城考古”國際學術論壇（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 栗山雅央
2. 発表標題 「班固「幽通賦」の曹大家注が持つ學術性について」
3. 学会等名 第66回九州中国学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 栗山雅央
2. 発表標題 「關於「幽通賦」曹大家注的學術性所在」
3. 学会等名 中国文選研究会第十三届年会暨“百年「文選」学研究回顧与展望”國際學術研討会（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 栗山雅央
2. 発表標題 「關於「三都賦」以後「都邑賦」的展開情況」
3. 学会等名 第十三届國際辭賦學學術研討会（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 栗山雅央
2. 発表標題 「中日辞賦研究情況の差異 以二十一世紀以後為中心」
3. 学会等名 “中日周秦漢唐文學學術的再出發”學術研討會暨第八屆周秦漢唐誦書會（招待講演）（國際學會）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 栗山雅央
2. 発表標題 張淵「觀象賦」創作が持つ文學史的意義について
3. 学会等名 第69回九州中國學會大會
4. 発表年 2021年

〔圖書〕 計1件

1. 著者名 栗山雅央	4. 発行年 2018年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 550
3. 書名 西晋朝辞賦文學研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関